

「新しい学び」を測定・促進するアセスメントテスト

みらいPASSジュニア

教員用ガイド

CONTENTS

【解説編】

開発の背景・測定項目	1
測定結果のご活用	2
PROG-J	3
LEADS-J	6
個人結果の見方	7

【指導編】

結果のご返却にあたり	12
学年に応じたご活用	12
ワークシートを使った指導展開例	13
面談指導でのご活用	15
ジェネリックスキル向上のために	19
個人結果アドバイスコメント一覧	20

結果のご確認にあたり

生徒に結果を確認させるにあたり、先生より以下のポイントについてアナウンスいただくようお願いいたします。ワークシートを用いた指導の展開例、また面談でご指導にあたる先生に向け、「面談指導でのご活用」をご紹介しますのでお目通しください。

生徒に伝えていただきたいポイント

①活用の目的

どのような目的で実施したのか、結果をどう活かしてほしいのか、学校(学年)で定めた目的や以後の行事・指導との関連性・スケジュールなどと併せてお伝えください。

②まずは自分の「強み」の確認から

テスト結果は「受験した時点」の自分の能力や考えを、ある一面から測ったにすぎません。あくまでその一瞬を切り取った「写真」のようなものです。普段のテストのように良かった、悪かったと一喜一憂するものでなく、まずは自分がどのようなところに「強み」を持っているかを把握し、その上でこれからの学校生活で何をすべきかを明らかにすることが大切です。

③(ジェネリックスキルは)レベル1からスタート

今回測定したジェネリックスキルは、人生を通じて成長する力であり、誰もがレベル1から能力が向上していきます。レベル1、2だからダメということではなく、「これからの伸びしろがたくさんあるね。上級生、高校生になっても意識していこう」と前向きな表現で伝えてください。

④保護者と共有する

保護者用の「報告書の見方」資料をご用意しています。こちらの共有にあわせて、「テストの結果をもとに保護者の方と普段の学校生活や、将来への考えについて一緒に考えてみよう」と促してください。

その他にも
受験後にご活用
いただける
資料をご用意
しています。

生徒用ガイド

簡単な結果の読み解き方、活用の仕方などを掲載した資料です。

解説映像

テストの説明、結果の見方、簡単なワークを行う映像です。

※詳細はみらいPASSナビ内の「資料室」ページをご確認ください。

学年に応じたご活用

学年に応じた指導を行うことで目的が明確になり、その後の指導がより効果的に行えます。

<1、2年生>

生活面を中心に、中学生活のリズム確立

中学1、2年生では、まず中学生活のリズムを確立すること、そして問題があれば早期に発見することが大切です。まずは、P16、17を参考に、ジェネリックスキルから生徒のタイプや特徴を把握しましょう。続いて普段の生活状況(時間の使い方)、意識などに問題がないかを確認します。学校生活に慣れてきたことによる意識の低下を防ぐためにも、個々の特徴を踏まえつつ、学習習慣をしっかりと作ることが必要です。

<3年生>

高校進学を見据え、進路意識の醸成、目標設定

中学3年生では、高校進学を見据えた進路の方向性の確立が大切です。進路の「意識と行動のバランス」「進路希望」などを確認し、準備が不十分な生徒を把握しましょう。また最上級学年として、部活動や学校行事などでは、ジェネリックスキルを意識した行動をとるよう促すことで、成長が期待できます。キャリアプランをしっかりと考えさせること、またその機会を作ることが大切です。

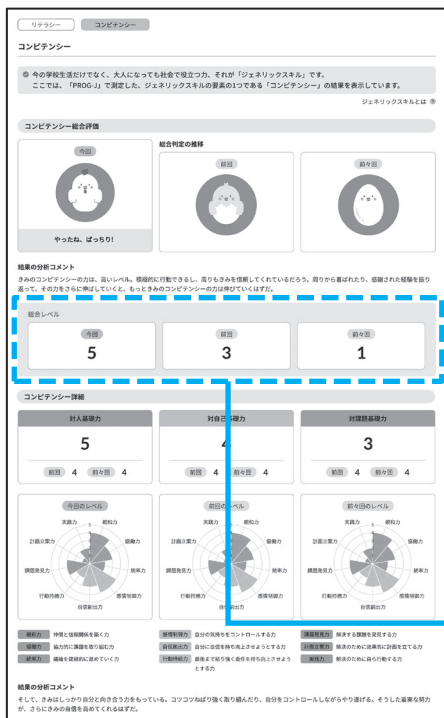
面談指導でのご活用

面談を通じて結果についての共通理解を持つことで、生徒・教員間でのより深いコミュニケーションへとつながります。面談を行う際の注意点や補足事項、またジェネリックスキルの結果から見る生徒のタイプ別傾向などを記載しています。

面談時に特にチェックしたい項目

P17、18では、テストの結果から生徒をタイプ分類し、それぞれの傾向や指導の際に必要なポイントを記載しています。

タイプ分類に用いられる主なデータは、個人結果の以下に表示されています。



「LEADS-J」→「タイプ・傾向」
LEADS-Jの結果から志向性のタイプを5つに分類、表示しています。

「PROG-J」→「リテラシー」「コンピテンシー」
ジェネリックスキルのレベルを表示しています。P16では、リテラシー・コンピテンシーの高低により生徒をタイプ分類し、それぞれの特徴を記載しています。

面談にあたっての心得

みらいPASSジュニアは良し悪しを見るテストではありません。生徒自身が気づいていない「強み」や「可能性」を自覚させ、今日明日からの行動にどう活かしていくかをともに考える面談指導をお願いいたします。

①気づきを促す姿勢で

- ・「結果を見てどう感じましたか?」と、生徒自身に「自覚」や「気づき」を促します。
- ・思い込みや矛盾に対し、「なぜそう思うのですか?」と問いかけます。
- ・分析やアドバイスだけでなく、傾聴姿勢で向き合うことが大切です。

②結果の解釈は柔軟に

- ・結果は生徒のパーソナリティや、能力の限界を定義するものではありません。
- ・意図しない結果に対し、生徒が否定的な反応である場合、「思っていたことと違ったことはありますか?」「それはどうしてですか?」と問いかけます。
- ・問いかけに対する答えには、「そうだったんですね、と「受容」と「共感」の気持ちを持って受け止めます。

③アセスメントの限界を知る

- ・あくまで生徒の一時的な「傾向」「能力」「生活状況」「意識や興味」を測っているものにご理解ください。
- ・アセスメントには常にある程度の「測定誤差」が生じます(受験態度などによっても、結果は変わります)。